

特集 維持透析患者の喪失感—理解・克服への支援

Editorial

大平 整爾*

北大に入学したその年の6月に18歳の私は、48歳の母を肝不全で失った。あまりに急なあっけないことで、衝撃が強く虚脱状態になってしまった。1週間大学を休んだときに、事情を聞いて心配した同級生が下宿を尋ねてきてくれた。彼は小一時間ほど雑談をして「“Count your blessings.”という言葉を知っているかい」と何気なくだが真剣な眼差しで言って帰って行ったのだった。少しして、彼が2年前に母親と死別していることやクリスチャンであることを知った。Count your blessings. は讃美歌の歌詞にあり、「自分に恵まれているものを数えてごらん」という意味であることがわかった。Name them one by one. (それらを一つひとつ挙げてごらん)と続くらしい。彼の謎めいた眼差しが気になる一方、何か靈感が働いて久しぶりに授業に出たその日の夜、わがblessingsを雑記帳に書き出してみた。父親・姉弟妹・親戚・友人・教師・下宿のおばさん等々、私を取り巻いている人々を列記するだけであっという間に50人を超えた！それから、思い出や健康・読書・音楽・スポーツなどあらゆることを些か向きになって書き連ねていった。気がついたときにはノートが6ページ殴り書きの文字で埋まって、不思議なことに私の心も何やら安堵感に溢れていた。「私は一人ぼっちなんかではない」という気持ちを強くもてたのである。この作業が私の萎えた心をしゃきっとさせてくれたことは間違いない。その後も死別した母を思い出すことはしばしばあったが、Count my blessingsで乗り越えられてきている。

さて、筆者は過去約40年間、進行腎不全患者の透析開始に関わってきたが、この療法に馴染めなくて強い絶望感を漂わせ「何もかも失った」と嘆く患者が少なくはない。幾人かの患者には、この方法を採用彼らの苦しみを和らげるのに、いくぶんかは役に立ったと感じている。なかなか心の内を明かさない患者に対しては、ごく普通の日常会話を交わすことこそが肝要だ。「何もかも失った」というその患者が、透析による新たな命を新たな環境の中で新たな人間関係とともに生きていけるように支援す

* 札幌北クリニック



るためには、言い古されてはいるが透析スタッフの「傾聴」が基本となる。しかしその前に「患者に話させる切っ掛け」を作り、「患者が話しかけやすい雰囲気」を醸し出すことが必須となる。

慢性疾患患者はいくつかの喪失（感）を経験するが、病勢の進行に伴いさらに喪失（感）が追加される危惧がある。高齢者であれば、高齢化という休みなく進行するプロセスが疾病の増悪過程に拍車をかける。維持透析を余儀なくされる末期慢性腎不全患者たちも疑いなく、この厳しい現実には晒されている。患者は自らの悲運を嘆き、そのやりきれなさから往々にして医療スタッフに対して攻撃的な態度か、攻撃性と怒りとを秘めた寡黙な態度をとりがちである。広い意味の障害者がどのように障害と随伴する喪失感を乗り越え受容していくのか、そして障害と喪失感を受容したその先に何が待ち受けているのか。周辺に位置して支援しようとしている医療スタッフは、障害と喪失感に打ちひしがれる患者の「目に見える喪失」（身体部位・身体機能・社会的役割や人との関係性の低下・経済面の困窮など）だけではなく、「目に見えない喪失」（自分らしさ・自尊心・プライド・自信・存在証明・計画した将来像・夢・希望・人間関係などを失うこと）に対しても深い配慮を払わなければならない。機能障害やそれに伴う喪失感には年齢的や個別的な相違があろうが、これをどう捉えるべきなのか。「障害の受容」などという事態が本当に当の患者に可能なのであろうか。多くの患者は障害に侵され喪失体験に苛まれながら、その先を生きていくうえで、どのように自らの心と折り合いをつけているのであろうか。私ども医療スタッフに彼らを支援できることがあるとすれば、それは何なのか。

本特集では、「喪失」「喪失感（体験）」をそれぞれの職種の立場から考察していただき、なんらかの患者支援策や方向性が提示されることを期待するものである。患者が抱きがちな頑なな気持ちを解きほぐして、患者にやさしさを受け入れる心のゆとりを生み出すような手助けが、必ずや可能であろうと信じている。

透析生活の開始はすべて喪失で終始してしまうのでは決してなく、一時期その状態にあったとしても、気持ちを奮い立たせて新たな生活へ邁進していく患者は多い。そうでなくては、わが国の透析患者の約 28 % が透析歴 10 年以上を果たせるわけもない。強い喪失感を味わっても彼らが心を立て直し強く生き続けていることに敬意を表し、透析患者を囲む人々のいっそうの理解と協力を望みたい。